56　日本統治下台北における二つの精神病院の成立と展開：私立養浩堂医院と官立養神院

橋本　明
愛知県立大学

台湾総督府の『昭和十四年版 台湾の衛生』（1939年）では，台湾の人口あたりの精神病者は「内地より遥かに少数な割合である．一般に文化の程度低く，生活簡易なる社会に於ては精神病の発現も比較的稀なるは当然」としている．一方，それより前に刊行された雑誌『社会事業の友』（1930年7月号）は台湾の精神病者保護を特集し，当地の精神病者数の増加傾向と精神病者収容施設の不足を指摘している．同誌のなかで台北帝国大学医学部の下條久馬一らは，「本島には未だ精神病者監護法の制定がない，従つて監置を要する精神病者は財団法人台北仁済院（収容人員四十五名）及私立養浩堂医院（収容人員約三十名）に入院加療の者を除いては，孰れも私宅監置に附せられ，家人より獣畜の如くに取扱はれ，永久に救はれる途がない」と現状を批判している．

下條らの論文にある養浩堂医院は，中村譲が台北に設立した台湾最初の精神病院である．中村は1905年に東京帝国大学医科大学を卒業し，1916年に台湾に渡った．台湾では基隆医院院長として勤務，同時期に台湾総督府医学専門学校教授なども兼任した．1929年に基隆医院を辞したあと，私財を投じて台北市内の宮前町に養浩堂医院を開設した．だが，1930年3月，女性入院患者が病院に放火し，患者5名が焼死した．『台湾日日新聞』（1930年3月23日）は，病院側の言として「世間を騒がせて誠に申わけない事です，本来なら此の際やめてお詫びすべきですが失火の当時は二十六人の入院者もありその跡始末もありどうしたら宜いかと考へております 中村当院長は大正八年以来総督府へ官立精神病院の設立を陳情してをりますが未だその運びに至らず補助金も未だ頂いてゐません 台湾で此の種の長く入院を要する病院の経営は非常に困難であつて（中略）官立のものが是非とも必要ではないかと考へられます」と記している．とはいえ，中村は病院経営を続け，1937年には市内の下内埔に病院を新築移転した．

一方，記事で待望されていた「官立のもの」は，1934年設立の台湾総督府立精神病院・養神院を待たねばならなかった．養神院の『昭和九、十年度 年報』（1937年）によれば，1929年に時の総督・石塚英蔵が本院の創設を決意．台北市の東方郊外の台北州七星郡松山庄五分埔に，収容定員100名の精神病院建設が計画され，1932年7月に起工，1934年10月に竣工，1935年2月1日から患者の受け入れを開始した．九州帝国大学出身で養神院の初代医長の中脩三によると，養神院のモデルは1931年に精神病院法にもとづき建設された福岡県立筑紫保養院である．筑紫保養院は「当時としては近代建築の粋を集めて作られ（中略）浴場，便所共に患者用としてはもったない程立派で，ホテルにしても恥かしくない程」（福岡県立太宰府病院『創立五十周年記念誌』1982年）だった．中は新天地・台北の養神院での治療への抱負を語るなかで（「社会事業としての国立精神病院の意義」『社会事業の友』1935年12月号），病院を保護隔離のためのものではなく，「治療主義精神病院としなくてはならない」と述べ，「精神病院の価値は退院患者数とその治癒率にある」ことを強調する．内地の病院について「東京府松澤病院の如き殆んど患者の出入のない枯渇せる旧式病院はさて置き」としたうえで，モデルとなる筑紫保養院と比べても，開院後8ヶ月が経過した養神院の退院患者数と治癒患者数の実績は勝っていると自負する．

戦前台湾の精神病治療・看護に両病院が果たした役割は小さくないが，日本統治が終ったあと京都に引き揚げた中村譲の養浩堂医院は廃院となった．一方，戦後の養神院は台湾省立の錫口療養院，台北療養院などへと名称が変わり，1979年には近郊の桃園市に移転し，桃園療養院として継続している．現在，下内埔に移転後の養浩堂医院旧敷地には国立台湾大学の動物病院が，養神院旧敷地には高層アパート群が建ち，往時の痕跡はほぼない．